



甲状腺機能低下症ってなに?



どんな
病気?

甲状腺ホルモンの量が減って体じゅうの代謝が落ち、
体調不良や脱毛が起きるシニア期に見られる疾患。

甲状腺は、首の上のほうにあり、チョウが羽を広げたような形をしていて気管についている臓器です。
食べたものをエネルギーに変える、発毛を促すといった全身の代謝をつかさどる甲状腺ホルモンを
分泌しています。

主な 症状

動作が鈍くなる、脱毛するなどの
症状があらわれます。

体型や 顔つきの 変化

食べ物の代謝ができなくなり、食量は変わらないのに太って
きます。皮下組織に変化が起きるため、体全体がぶよぶよとし、
まぶたも下がって悲しそうな表情に。

- 横から見た体型がくびれない寸胴体型に
- 食欲が変わらないのに太ってきた
- 悲しい顔つきになる



皮膚の 症状

体のどこでも脱毛しますが、とくに鼻筋やしっぽの脱毛が特徴
です。脱毛したしっぽが、ネズミのしっぽのように見えることから、
ラットテールと呼ばれることも。

- 鼻筋やしっぽ全体の脱毛
- 体全体の脱毛

治りにくい膿皮症や外耳炎が
病気発見のきっかけにも
膿皮症やニキビダニ症といった感染症、
外耳炎などが治りにくい、繰り返す場合、
甲状腺機能低下症が隠れていることもあ
ります。

活動の 変化

甲状腺ホルモンは、全身の代謝にかかわるため、元気の源といわ
れることも。だるそうな様子や寝てばかりいるなど、活動性が低下
します。

- だるそうに見える
- 寝てばかりいる
- ぼーっとしていることが増えた
- 暑いのに寒がる

「うちの犬、年だから」と
見過ごされやすい
甲状腺機能低下症はシニアによく見られ
る病気。そのため、病気のせいだと動作が
鈍くなっても、「年だからしかたない」と
気づくのが遅くなるケースも。

主な 原因

自己免疫がかかわるケースが多いとされ
以下の3つが挙げられます。

3つの原因

多い

1 自己免疫や腫瘍など甲状腺そのものの異常

原因不明の甲状腺萎縮や腫瘍のほか、自己免疫が甲状
腺組織を壊してしまうと考えられています。

まれ

2 甲状腺に働きかける下垂体の異常

脳の異常で下垂体が働かなくなるケースですが、犬で
は非常にまれです。

3

3 クッシング症候群などほかの病気が原因に

甲状腺に異常はなく、クッシング症候群、肝疾患、腎疾患
などの病気の影響で甲状腺ホルモンが減少します。

好発年齢

9才以降の シニア犬

9才を過ぎると、甲状腺機能
低下症になる犬も増えてき
ます。愛犬の様子の変化を年
のせいとせず、まずは獣医師
に相談を。

どの犬もなるものの とくに多い犬種



ゴールデン
レトリバー



ミニチュア
ダックスフンド



柴などの
日本犬



アメリカン・コッカー
スパニエル など

検査と 治療

血液検査やホルモン量測定などで診断し、治療は投薬で行います。

検査は、おもに血液検査と画像診断です。血液検査では、甲状腺ホルモンの量なども測定。画像診断は、エックス線や超音波検査などを行います。検査結果と症状から甲状腺機能低下症の疑いが強ければ、ホルモン製剤を服用。週単位でホルモン量を測定し、症状の変化を確認しながら投薬量を調整します。失われた甲状腺の機能は回復しないため、投薬は生涯続きます。

いぬに多い病気、そこが知りたい! は「いぬのきもち」で連載中!

●こちらは、掲載した記事を再編集したものです。

アニコム損保ご契約者が
マイページから定期購読を申込むと

2号(2ヶ月分)無料!!

